「菜の花畑に入日うすれ…」の歌詞で始まる**「朧月夜」**は、東京音楽学校（現・東京藝術大学）の教授も務め、教会オルガニストでもあった岡野貞一（1878-1941）の作曲。この童謡は今も小学校の音楽の教科書に載り、歌い継がれている。

日本のマリンバ奏者の先駆けとして知られる安倍圭子（1937-）の**「六本撥による五木の幻想」**は 1993 年の作。その名の通り、6 本の撥（ばち）を用いて演奏される。「五木の子守歌」をベースとし、静かに、時に激しく、自由に旋律が紡がれていく。重ねられた豊穣な音のなかに子守歌の情感が溢れている。

瀧廉太郎（1879-1903）は、24 年という短い生涯においてピアノ曲や歌曲まで様々な作品を残した。**組歌《四季》**は 1900 年に出版。有名な「春のうららの隅田川…」で始まる「花」を筆頭に、「納涼」「月」「雪」の 4 曲で構成され、日本の四季の情景が多彩に描かれている。

わが国を代表する国際的作曲家、武満徹（1930-96）にとって〝うた〟は欠くことのできない音楽的要素であった。**「Mi・Yo・Ta」**は、武満が山荘を構えた長野県の御代田のことで、彼はここで多くの作曲を行なった。メロディは若き日の黛敏郎のアシスタント時代に書かれたが世に出ることはなく、武満の葬儀で黛により初めて披露された。**「小さな空」**は武満の代表的歌曲で、若い頃、折にふれて娯しみのために書いたものの一つ。歌詞も自身が書き、温かく、懐かしい雰囲気が心に残る。

狭間美帆（1986-）はアメリカを拠点としながら、ジャズを中心に創作を続ける作曲家。**「マリンバのための小狂詩曲」**は、学生時代から友人であった塚越慎子の依頼で作曲され、宮城道雄の「春の海」が素材となっている。幅広いダイナミクスのなか繊細なマリンバが「春の海」の音階・旋律を奏で、それらを飲み込みながら音楽が疾走していく。

山中惇史（1990-）が塚越慎子から依頼され、山田耕筰の歌をメドレー形式で作編曲したのが**「山田耕筰のうたによるタペストリー」**。日本人なら誰もが知るだろう山田耕筰の〝うた〟が、マリンバの温かい音色とともに編み込まれている。

細川俊夫（1955-）は武満徹亡きあと、国際的にもっとも名高い日本人作曲家と言っていいだろう。**「さくら」**は、塚越慎子によって 2008 年に初演された。日本古謡「さくらさくら」の旋律が断片的に浮かびあがり、雄弁かつ静寂に聴く者を深い余韻へと誘う。

「日本のうたメドレー」には、日本の有名な〝うた〟がメドレーで登場する。どんな曲が出てくるか、乞うご期待！

コンサートの掉尾を飾るのは、瀧廉太郎**「荒城の月」**。本邦初の西洋音楽による歌曲とされるが、歌詞は七五調。枯淡の楽想が醸す空気感・色彩感はあくまでも日本的だ。